

Title	同調主義の正体 : 『孤島の太陽』を契機に考察する
Author(s)	林田, 雅至
Citation	大阪公衆衛生. 2021, 92, p. 67-68
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/79282
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

同調主義の正体——『孤島の太陽』を契機に考察する

林田 雅至

大阪大学COデザインセンター「社会イノベーション部門」教授

今年度藤原九十郎賞¹⁾の栄冠に輝いた受賞者の掲載原稿校閲から、高知県沖ノ島出身、駐在保健婦・荒木初子(1917年-98年)をモデルにした映画及び連続テレビドラマ『孤島の太陽』の存在を初めて知った²⁾。

高知県の離島、沖ノ島で県の駐在保健婦として挺身し、その献身的な努力により乳児死亡率は下がり、風土病のフィラリア患者も減少したことで第1回吉川英治文化賞(1967年)³⁾の榮譽に浴した荒木初子は作家・詩人伊藤桂一(1917年-2016年)の取材を受け、『「沖ノ島」よ 私の愛と献身を離島の保健婦荒木初子さんの十八年』(1967年)が上梓される。

テレビドラマ版(1970年)の先行映画『孤島の太陽』(1968年)は、この伊藤桂一著取材小説を基に、朝の連続テレビ小説「おはなはん」(1966年)で当時人気絶頂期にあった榎山文枝を主演に、劇団民藝総動員出演で製作された。

一方、第9回藤原九十郎賞(1987年)を授与された乾死乃生(1923年-2004年)⁴⁾のことを言及しておきたいのは、(公財)大阪公衆衛生協会現事務局長・井戸武實が現役の頃、長年ともに仕事をされたからである⁵⁾。

常に現場で信念を貫いた気骨のある乾死乃生(しのぶ)はインタビューに答えて曰く。

「保健婦活動で苦勞した人に賞をあたえ、マスコミがそれを美談風荒木に書くことには憤りをおぼえます。国がきちっと保障すべきなんです。孤島で活躍した荒木初子さんが、こういう形でしか報われないのでしょうか。駐在制だって、保健婦だけが行って、医者が行かないなんて……。 (中略) 保健婦を僻地へやって、医者がコンピューターで保健婦をリモコンする。ほんとうに生命を大事にするんだったら、こんなことおかしいでしょう」(木村哲也著『駐在保健婦の時代 1942-1997』医学書院、2012年9月)、p.284⁶⁾。

ここで考察を加えておきたいのは、国策による同調主義の問題である。荒木初子自身も持ち上げられて美化されたことに違和感を抱いたと言及するが、本質的には乾が指摘した通り、厚労省という国民の健康行政を統括する国家機関が財政的な

問題から、離島に高給になる医師を派遣せず、安く上げた結果を酷評するわけである。その謂わば不都合な真実を隠蔽するために荒木は巧みに利用され、映画テレビメディアも格好の宣伝媒体を担ったのである。ただ、それに啓発されて保健婦を目指した、献身的な素直な数多くの若年層の存在自体は肯定されてしかるべきである。

最近も元ドイツ大使故・大島浩⁷⁾の生々しい肉声が公開され、改めて風潮に流される「バスに乗り遅れるな」という標語で三国同盟をこぞって支援する国民の映像が不気味であった。

林田は小学校時代、テレビ初アニメ「鉄腕アトム」で育ち、同世代の少女スターが広告塔キャラクターとなった製菓メーカーのチョコレート菓子を頬張りながら、アトム、兄コバルト、妹ウランの存在を何の疑問もなく受け入れ、強力に推進する原発行政を暗黙に支援する分子として、無意識裡に取り込まれていた世代の一人である。

一方、東京一人暮らしの頃、大学から近かったこともあり、名画座の一つ池袋文芸坐に日参した学生時代、アウトロー怪演役者・原田芳雄主演「原子力戦争」(1978年)、「胎内被爆児」長谷川和彦監督「太陽を盗んだ男」(1979年)などに一喜一憂して、反原発を意識化したのである⁸⁾。

同時期、日本は、エズラ・ファイヴェル・ヴォーゲル(傅高義)著『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(1979年)をベストセラー小説とし、国民の我田引水、自我礼賛の格好の材料(メディア媒体)として、国民に鼻高々で高慢ちきな自惚れ意識を持たせることに成功し、勿論原発行政は猪突猛進状態で、国民は同調主義の大波に呑み込まれている⁹⁾。

さて、乾自身も例外でなく、戦前同調主義に陥り、実は彼女の戦争体験は「日本国」に尽くす、献身的な従軍看護婦であった。

今回のコロナ禍、世界中が自国中心主義を標榜し、最たる悪しき鑑は米国社会で、キング牧師の死などで所謂人種差別は既にWe Shall Overcomeしていたものと教育され、思い込んでいたが、社会主義の所産国民健康保険制度が敷かれる見込みもなく、過激的貧富の深淵格差によるBlack

Lives Matter v.s. White Powerの対決色が濃厚で、先行きは全く不透明である。

前近代社会の身分制度が崩壊して誕生した所謂近代市民社会は理想郷なのだろうか？明治の文明開化以降、時代によって変化する市場開拓・拡大の仕掛け、所謂三種の神器に翻弄されながら——アジアの敬虔な仏教徒、外国人留学生に酷評されたのは、日本人は何でも手段を選ばず、市場開拓に奔走するという的を射た指摘の通り——、物質的な意味で、近代化達成は可能であっても、意識の近代化は達成されないものだろうか？

エズラ・ボーゲルの指導で、狂瀾怒濤自国礼讃主義の「ジャパン・アズ・ナンバーワン」社会に留学・就職した商学者（戦前用語：経営学者）クリスティーナ・アメージャンは、薄っぺらな「和魂洋才」をひけらかす上司の下、「ガイジン」扱いされる、当時の非多様性、非寛容性の現実に辛酸を舐めている¹⁰⁾。

註：

- 1) 藤原九十郎賞（最終閲覧：2020.11.27）
歴代藤原九十郎賞受賞者氏名（大阪公衆衛生協会URL内PDF資料）：
<http://www.osaka-pha.or.jp/hujiwarasyou/pdf/kako%20jyusyousya.pdf>
（最終閲覧：2020.11.27）
藤原九十郎出身自治体紹介URL：
<https://www.city.goto.nagasaki.jp/gotowebbook/040/030/020/010/20190221144856.html>
（最終閲覧：2020.11.27）
「藤原九十郎の業績」（社団法人大阪生活衛生協会「生活衛生」、1978、22巻、2号）、pp.36-44（PDF）：（最終閲覧：2020.11.27）
中村隆一「大正末、昭和初年の尿尿事情・藤原九十郎と高野六郎の言論活動と実践」（口述記録）特定非営利活動法人・日本下水文化研究会分科会・尿尿・下水研究会URL：
<http://sinyoken.sakura.ne.jp/caffee/cayomo007.htm>（最終閲覧：2020.11.27）
公益財団法人・後藤安田記念東京都市研究会『都市問題パンフレット』デジタル・アーカイブ参照（藤原九十郎著作複数あり）：
https://www.timr.or.jp/library/digitalarchives_reaflet.html
（最終閲覧：2020.11.27）
- 2) 映画DVDは未発売である。地域ではその記憶を継承する取り組みはあるが、全国的な広がりには認められない：
日活データベース「孤島の太陽」：

浅沼一成「孤島の太陽」（国立保健医療科学院監修「あさのコラム」）,vol.10,2016.6.24：（最終閲覧：2020.11.27）

高知県柏島NPO法人黒潮実感センター「孤島の太陽」上映会（2008.9.21）告知：（最終閲覧：2020.11.27）

3) 吉川英治文化賞：

<https://www.kodansha.co.jp/about/nextgeneration/archive/22289>

（最終閲覧：2020.11.27）

4) 乾死乃生（最終閲覧：2020.11.27）

5) わたくしは乾死乃生さんと一緒に仕事をしました。私は昭和42年5月6日から藤井寺保健所に大阪府庁から赴任しました。そして、乾さんとは同和地区検診を一緒にしました。当時、藤井寺保健所の管轄する市は藤井寺市、羽曳野市、松原市の三市でした。

乾さんが藤井寺保健所保健師として松原市の同和地区「更池」地区を担当しました。昭和50年4月1日に藤井寺保健所から独立して松原市に松原保健所が発足しました。

そして、乾さんとは一緒に藤井寺保健所から松原保健所に転勤しました。

松原保健所には藤井寺保健所から10人くらい転勤となりました。転勤にあたり、当時の丸山創（はじめ）所長に一人一人所長室に招かれ、所長曰く：

「松原保健所ができたのは、住民の活動と要望でできたものです。そのことをしっかりと認識して業務を行ってください」と。

これまでの私自身の生き方は乾さん、丸山先生の影響が大きいと考えています。

（井戸武實：林田雅至宛電子メール：2020年9月4日）

6) 木村哲也『駐在保健婦の時代 1942-1997』2012, pp.338：（最終閲覧：2020.11.27）

7) 渡辺延志「駐独大使・大島浩、晩年の言葉」（朝日新聞Digital企画特集3 神奈川の記憶）、133、2018.11.10。

「国をミスリードした男」NHK「おはよう日本」2020年11月18日：（最終閲覧：2020.11.27）

8) 映画「太陽を盗んだ男」（最終閲覧：2020.11.27）

映画「原子力戦争」（最終閲覧：2020.11.27）

9) エズラ・ファイヴェル・ヴォーゲル（最終閲覧：2020.11.27）

10) クリスティーナ・アメージャン（最終閲覧：2020.11.27）